

〔書評〕

一筋の道を辿るということ

——畑中康雄・年刊『労働者』43号（2015年3月）を読んで——

池野重男

畑中さんへ。

遅くなりました。

いつものように一気に『労働者』43号を読ませていただきました。ありがとうございます。今回は「書評」という形で活字にしますが、でも、いつもの畑中さんへの私信という形のままで『労働者』を読んで私が感じたことを、乱雑なままにですが、書き連ねさせていただきます。

その前に、本誌の読者に私が畑中さんに出会った経緯を記しておきます。私が畑中康雄さんと出会ったのは、私が原発や死刑廃止といった運動の関係で東京に出かけたときには必ず寄る模索舎という、ミニコミ誌なども置いてある風変わりな本屋で、一冊百円の『労働者』を買い求めてのことでした。きちんとした装丁と製本なのに百円という値段設定にも驚きましたが、そこに展開されている小説の内容に驚かされました。炭鉱労働者を主人公にした大長編が今現在書かれ続けているということに、です。それはすでに連載の始まった長編の途中でしたから、これは何としても最初から読んでみたいと思った私は、同誌の最後にあった「発行者」である畑中康雄という人の住所に問い合わせの手紙を書いたのです。そして、その返事がある、大阪だったらと紹介されたのが、ちょうど知りあっていたグループのなかのひとりの、今は亡き渡辺さん¹⁾でした。彼が創刊の一九七一年以降の全号を持っているはずだから連絡してください、とのことでした。

これが九〇年前後の話ですから、もうかれこれ25年以上が経っているのですね。なお、手紙のやりとりだけで、じつは私は畑中さんに直接お会いしてはいないのです。手紙のやりとりといっても、基本的には『労働者』が年に一回送られてくるたびにその感想を私が書いて送る——おそらく毎回すべてではなかったと思います。体調の問題などで欠礼したことがあったと記憶しています——というやりとりでしかありませんが。そして、そのやりとりが『労働者』第42号に畑中さんの律儀な保存のなかから生き返って紹介されていま

1) 渡辺さんには、谷透のペンネームで『鉄路のサヴァンナ——国鉄労働者通信』（ユニウス 83年）という著作がある。

す（顕命と匿名と両方で）。あらためてそれを見てみると、私はけっこうな量を書いて、我ながら驚きました。で、今更ながら気づいたのですが、私の肩書きが「大学教授」になっているのです。正しくは——何が「正しい」かは措いて——「助教授」、今風の表現では「准教授」なのです。「教授にならない＝なれない准教授」なのです。

これからいよいよ『労働者』43号の感想に入りますが、まずは「あとがき」の中の二カ所にウーンと唸ってしまいました。最初のもは畑中さんの「力」になっているというものに関連しての話です——

この第三部も前回同様、山中亘氏の『少国民シリーズ』全五巻、補巻一をお借りして、この稀代の労作に記録された当時の世相を、しっかりと頭に入れておきたい。

また、今回は長沢秀氏と龍田光司氏のお力も借りた。お二人とも、強制連行された朝鮮人労働者の足跡を克明に調べ、それぞれ本にまとめて出版している。

長沢氏は、国内はもとより、サハリンにも渡って調査をしているし、龍田氏は、韓国に何回も足を運び、強制連行された朝鮮人労働者の追跡調査をしている。……

なにか一筋の道を辿っていると、必ずどこかで「同志」と遭遇できるものである。決して孤独な歩みにはならない。そのことを噛みしめている。

私は、すでにお知らせしましたように、来年の3月で退職です。26歳の助手での赴任（まだ大学院生でもありましから学割を使う助手というなんとも恵まれた身分でした）から41年目の教員生活ですが、いったい自分は畑中さんの言う「一筋の道を辿って」きたと言えるだろうか、と反省せざるをえません。というのは、教員という上から目線の安易さに安住してしまってきているのではないかと（私の66歳という老齢と今日の学生情況が絡まってのことなのでしょうが）感じてしまう場面が多いからです。40年もの教員生活を経て今の自分のありようを見ると、悔しいことに、そう感じないではられません。

私が「資本主義は勝利したのか？——<もうひとつの社会を求めて>」（『大阪経大論集』第42巻第5号 92年3月）や「情報社会と炭鉱社会——いま何故に<炭鉱>か」（同 第43巻第3号 92年9月）を書いた頃、九州と北海道の炭鉱を回りましたが、その時に私が訪問先の会社の接待で夕食を摂ったことで「炭鉱夫たちの労働のピンはねからのお金じゃないの?!」と、その無思想性を同居人に厳しく指摘され、「池野さんはそれで畑中さんに顔向けできるの?」とまで言われたことを思い出します。そのことを畑中さんに書いた私の手紙に、優しい畑中さんは、「1回くらいはいいよ」と許して下さったのでした。

で、これからでも遅くはない、再起するのだと、『労働者』を書き続ける畑中さんの頑張りに今回元気をもらいました。ありがとうございました。

そして、「あとがき」からもうひとつ。国会図書館からの『『年刊労働者』がとどいていないがどうしたのかという問合せ』があったという事実、脱帽です。そんな丁寧な仕事

をしている国会図書館職員氏と、そして、もちろん、畑中さんの継続されている力に。

この二つのことを「あとがき」に書かれている畑中さんの、充実感あふれた姿勢が私の目に浮かびます。そして、私の停年後のカンフル剤をもらいました。

以上をとにかく最初に言わせてもらいましたが、これからいつものように思いつくままに書かせてもらいます。

最初に、「樺太の石炭を運ぶ船がないので、樺太の炭鉱労働者を『内地』の炭鉱に移すという」「『全山徴用令状』が無い降りてきた」(p. 8) ために白龍丸での船旅から小説は始まりますが、それを読みながら私がずっと疑問だったのは、いわき炭砦(福島県)に樺太から船で行くのには日本海側の新潟港経由で鉄道に乗り換えて太平洋側に行くという経路についてでした。いわき炭砦という大きな炭鉱があるのだから、それがある太平洋側に石炭を積み出すためにも港くらいはありそうなのに、です。当時の徴用にあつての事実としては、しっかりと調べて書かれる畑中さんのことですから、きっとこのルートだったのですが、それにしても、このルートの不思議さというか非効率性——白龍丸が間宮海峡から津軽海峡とそのままで航路を辿れば新潟～福島間の鉄路は無用です——は、何か理由でもあるのでしょうか。

それにしても、頑健なというイメージがある坑夫たちが船酔いするというのは、論理的には決しておかしくはないのですが、でも、ちょっと笑います。もっとも、私も沖縄に行く船で2日間、トイレに行って吐く以外はずっと横になっていました。一日に五食の私ですが、その時は持っていったおにぎりの中の梅干を口に入れるだけでした。その帰りは、軟弱にも、カネの問題ではないという言い訳をして、安い船をキャンセルして高い飛行機にしてみました。おそらく畑中さんなんかは決して船酔いしないタイプでしょうね。ピース・ボートでの世界一周もされているのですから²⁾。

3ページからの黒川明男の両親の、とりわけ父親の母親への暴力、「口惜しいなあ、情けないなあ」と涙する母親。これまでの『労働者』での黒川の成長の過程で黒川家のことを畑中さんが書かれていたのですが、改めて、そうだったなあ、経済的にしんどい辛さがあったなあ、と思い出しました。経済的にしんどいということは、本当に子どもには辛いことです。以前に畑中さんへの手紙に書いたことがあると思いますが、小さな村の小作人の次男坊だった私も、黒川のように乳酸飲料や新聞、牛乳を配達して家計の助けをしていました。これは私だけが特別なのではなく、兄妹と私の三人ともにやったことです。貧乏を子ども心にも感じたのは、たとえば、小学校で希望者に給食後に栄養剤のようなものが配布されましたが、その金額を払えない子どもたちは先生がカネを払った子どもたちだけにそれを配布するのを見守るしかなかった、そんな時代でした。いま思うと、これはとんでもないひどい仕打ちですよ。体が大きかったがゆえにガキ大将でもあった私にも、手

2) 畑中さんの著作のなかには、『地球ふた回り八万九千キロの船旅』(技術と人間 2005年)がある。

を出せなかったのです。

そして、その悔しい思いは、私の目の前にいるいまの学生たちにも通じるはずです。いまの学生たちを見ていると、本当に格差社会の実態を感じさせられます。考えてみれば、こんなことはここ最近の話なんかではなく、ずいぶんと昔からあったのですよね。ほんとにずっと以前から東大生の親の年収がダントツに多かったと指摘されていたのですが、格差社会の今日ではさらに事態は深刻になっています。“格差の少ない総中流社会日本”という神話の現実がやっと誰の目にも見えるようになった、と言うべきなのではないでしょうか。教授会ごとに「学籍異動者名簿」（休学や復学もありますが、主として退学する学生の名前一覧）が回覧されるのですが、その名前の最後にある「事由」欄には必ず「経済的困難」があります。もっと抽象的に「進路変更」とか「その他」というものもありますが、中身を探ればそれらもじつは学費が支払えないということを端的に示す「経済的困難」なのかもしれません。

最近ではマスコミでも奨学金の問題が取り上げられるようになってきていますが、私の目の前の学生たちはほとんどが奨学金を借りています。“奨学金”というと聞こえはいいのですが、この低金利下、しかも企業は借りないので（大手は自己金融だし、中小は貸してもらえない）銀行にはたっぷりと資金がありますから、消費者金融並みになっています。住宅ローンも1%を切れる時代です。そこに奨学金というローンが新しく出てきたのですから、銀行にはとてもおいしい話なのです。日本育英会という国の事業を廃止したのも、じつはこういう背景があつてのことなのでした。規制緩和といい民営化といい、それらがいいことだ——国がやると効率が悪いが民間だと競争があつていい——という神話の流れのなかの一環です。

ある学生は3つの奨学金を借りていて、卒業時には800万円を超えます。少しでも借入額を減らそうとすればアルバイトに励むしかありません。とすると、大学に顔を出す暇がなくなって単位が取れないし、本を読む時間もなくなってレポートはコピー（インターネットから誰かの文章をコピーすること）で溢れます。本当に見事に同じレポートが出されるのです。みんながパソコンから取り出すのですから。本を読まなくとも感想やレポートが出来上がるのです。私がずっと続けてきた毎月1冊の読書とレポート提出という課題は、だから、もう成り立たなくなって、5年ほど前に中止しました。

かつて、畑中さんが書かれた『崩壊する自動車工場』（技術と人間 92年）を課題図書にした時に、ひとりの学生が国鉄（今JR）で働いていた自分の父親のへんこつな生き方を自分のなかで整理し見直すレポートを書いてくれたことがありましたよね。いま手元にある私の抜刷のなかから該当のものを探してみたら、「日本型経営と保険——学生たちのレポートから——」（『大阪経大論集』第44巻第1号 93年5月）にそのレポートを載せていました。私はそこで、「私が畑中氏の著作『崩壊する自動車工場』を推したのは、氏が炭鉱労働者として培ってきた確かな眼で、『日本型経営』の象徴である自動車工場の実態を描いているからである。」（78ページ）と書いています。もう22年も前の話なんです。こういうことも、今では望むこともできないのです（じつは、もうひとつ別にこのレポー

トに関連して、「学生は“労働現場”をどう読んだか——『崩壊する自動車工場』によせて」と題して、池野高理の名で『技術と人間』1993年3月号にも書いています）。

さて、課題本を読まずにインターネットで関連情報を集めて切り貼りすることでレポートが仕上げられるという事態が当たり前となってしまった今日では、当事者性を求められなくなった課題図書でのレポートではなくて、コピペもできない＝自分で書くしかないものとして自分の具体的な日常についてレポートしてもらうのですが、保険論受講生のレポートに、「保険なんてホントに必要な時には役に立たなかった」というのがありました。自営業の父親が必死に金策に走り回って遂には保険の解約まででしたが、結局破産して病気になるってしまい、その時には保険がなかったのだ、と。で、彼女は時給4000円のお酒飲み相手のバイトをしているというレポートの最後には「こんなこと、もうやめたい！」とありました。あまり講義には出てこなかったのですが、彼女の顔を見たときには講義が終わったあとに教室を出るタイミングを合わせて一緒になって、「無理するなよ」と声をかけるだけはしました。彼女のレポートが出た後に気がついたのですが、他に3人のそういったアルバイトをする女子学生がいました。他のアルバイトに比べたら確かに時給はいいのですが、でも、ただでさえ客商売は神経を使ってしんどいことなのに、酒を飲む客の相手なんて大変でしょうね。遺伝的に酒を飲めない私には酒飲みへの偏見がありますから、よけいにそう思うのかもしれない。

アルバイトに関連して言えば、私が学生たちのアルバイトのしすぎを感じて「《労働者でもある学生》という視点」を書いたのは、1999年でした（『大阪経大論集』第50巻第4号 99年11月）。その頃はまだ学生個人の生活の点検をすることでやりくり出来た段階だったのだろう、と思います。しかし、今日のそれは、もう個人のやりくり段階ではなく、学生の家族を含めたレベルでの貧困になってしまっているのです。

アルバイトを3つ掛け持ちしていた学生は、「ときどき地面が揺れるんです」と書いています。そして、つい最近のゼミ生のレポートにも、やはり3つの掛け持ちアルバイトのことが書かれていました——

冬休みはお金を貯めるために3つのアルバイトを掛け持ちしました。郵便局での年賀はがきの販売と年賀はがきの仕分け、クリーニングの最終工程、そして、カフェです。さすがに3つの掛け持ちは大変で、深夜の仕分けは体力的に辛かったです。

いくら若いとはいえ、「さすがに3つの掛け持ちは大変で」キツイことでしょう。が、それをこなさざるを得ないのが現実なのです。

また、学生たちはアルバイトにおいて本当に真面目です。自分の講義よりもアルバイトを優先する心理には、たとえば、次のようなレポートを読むと一概に否定できないものを感じます——

私は飲食店でアルバイトをしていて、ちょうど一か月前くらいに先輩から、25日のバ

イト、俺、家の用事で行けなくなったから代わってくれ、と言われ、その時私は学校以外何も用事がなかったので、代わってあげることにしました。けど、2週間前に5限に「私のバイト、ブラックかも」の授業が入ってしまっ³⁾、どうするか考えた結果、その日、アルバイトがない人達に私と代わってほしいとお願いしたのだが、厳しかった。私は授業を優先したかったが、私がある日アルバイトを休んでしまったら他の人に迷惑だと思い、5限の授業を休み、アルバイトに行きました。授業に行き、アルバイトを休むことにすると、無責任だと思ったからです。

ところで、学生のアルバイトと読書について全国大学生協連（東京）の「学生生活実態調査」が、最近報じられました（日本経済新聞2015年3月1日）が、それによると、「2014年の下宿大学生の1カ月平均アルバイト収入額が08年のリーマン・ショック以降、最高の2万5560円となった」、「親からの仕送り額は13年を除き減少傾向が続いて……7万140円で、前年から2140円減少した」、「1日の読書時間がゼロと答えた学生の割合は、2年連続で4割を超えた。1日の平均読書時間は約32分と昨年から約5分増えており、同生協連は『読書する学生と、本を読まない学生の二極化が進んでいる』としている。1日のスマートフォン利用時間の平均は約2時間44分だった」といいます。これらの数字はあくまで「平均」でしかないからですが、それにしても私の目の前の学生たちとの事態との違いが際立ちます。この違いは、今日の格差の大きさを示すものなのでしょう。なにせ、戦後ずっと日本の貯蓄状況を調査してきた金融広報中央委員会によると、貯蓄がまったくない世帯が、80年代は5%前後、90年代は10%、そして今は30%です。こうした層にとって仕送りなんて絶望的ですから、アルバイトに励まざるをえなくなり、時間をかけて読書をしている時間がなくなるのは当たり前です。そして、だからこそ、ますます流行りの新自由主義・自己責任思潮を撃つ考えもあるということ——こうしたことを学生たちに伝え、自己責任論から自由になってもらうことも私の仕事です——が、学生たちの視野に入っていないという悪循環になってしまうのです。「現在、15歳から39歳までの死因のトップは自殺です。20代では死因の半分が自殺です。貧困で苦しんでいる人たちは、夢や希望を抱けない社会の中で、自分を責めているのです。……『自己責任論』は政治の責任を放棄するものでしかない」（宇都宮健児「貧困と格差を拡大させるアベノミクスへの『対案』」『自然と人間』2015年2月号）。

どうも、学生たちの現在の話が長くなってしまいました。退職を前にしているせいか、学生たちのことが気になってしまうのです。なにせ、私が2014年度～2015年度にかけて大学に申請している特別研究のテーマが「困窮する学生たちの現在をもたらず新自由主義下の教育のありよう」ですから。

3) もともとは私の保険論講義は当日の4限（14：35～16：05）なのだが、たまたまその日の5限（16：20～17：50）に予定されていた、大阪経済大学生協同組合主催の講演会「私のバイト、ブラックかも……」に出席するように、と指示していた。

再び、『労働者』の感想を続けることにします。

「今はもう大威張りで好きな映画館や劇場に行ける。明男はそれだけでも働いていてよかったと思う」(92ページ)に関連して。

学生時代に、“女工哀史”とか“搾取”とかいうけれど封建的で抑圧的な農村から都市へ働きに出た当時の女性たちの解放感もあるんだよ、と教師に言われてびっくりして、教条主義的になっていた自分を振り返ったことを思い出します。これもカネにまつわる話ですね。

「川手のおっさん」に関連して。

読者としては単純に憎めない存在に思えます。が、畑中さんが書かれているように「冗談じゃない、おっさんと組むくらいなら、俺一人でもええ」(p. 95)という声が現実にはあるのでしょうか。これは、一緒に働くにあたってとても難しい話です。とりわけ査定・評価が厳しくなってくると余裕はないでしょうから、そうした労働者に対してつい厳しくなってしまうことでしょう。それにしても、その「おっさん」が炭坑内で女性を目にして口に出した言葉(99ページ)、あるいは、現実の作業ののろさ(102～103ページ)、そして、仕事の流れの中で「のろい」だけではなく「仲間に入っているだけで、みんなをいらいらさせる」存在で、ついには明男に「損な人なのだな」(204ページ)と考え込ませるのを畑中さんが具体的に書かれているのは、そこにこういった意図があるのだろうか？と考えるしまいました。

畑中さんはこれまでもずっと働く仲間を大事に描かれてきました——といって、甘やかすという意味ではなく、やる気がない態度には厳しいです——から、私にはとりわけ違和感がありました。もっとも、ずっと後になってから、「よほど無理なやりくりがあったとしか思えな」い形で「川手のおっさんは、とうとう変電所当番ということになった」(203ページ)とあるので、それはそれで一つの解決を示されているのかな、とも思いましたが。さらには、昼寝をするなど、炭鉱では間接夫は「働いていない」(113ページ)という指摘があります——これはこれだけでも興味深い指摘ですが、今は措きます——が、そういう余裕があるとすれば、余計に川手のおっさんの扱いは他に道があるのでは、とも思いました。もちろん、危険な坑内労働にあって仕事ができないことは仲間にとって致命的になり得るということがありますから、いい加減な馴れ合いは許されませんが。現場労働から離れた私の甘さでしょうか。

ところで、言われてみれば当たり前の話なのですが、炭坑によって事情が違うことに、あらためて驚かされました。

坑内に女性が働くというのは、九州の炭鉱では、たとえば山本作兵衛さんの絵などでありましたが、いわき炭鉱でもそうだったとすると、それでは、樺太が、樺太だけが、例外なのでしょうか。そして、それはいったいどうしてなのでしょうかね？

「ズリ山」、ひょっとして九州で言うところのいわゆる“ボタ山”のことなのでしょうか、これが樺太にはないとのこと。「大平炭山の石炭は石の混入が少なく、どこかの沢に捨てている」(63ページ)だけというのですから、コスト的には随分と安くつくことでしょうね。もっとも、「どこかの沢に捨てている」というのも如何にもアバウトですが。

そして、炭鉱というとガス爆発というイメージがありました——「炭鉱のカナリア」というのは有名ですから。だから、練香で導火線に火をつける(123ページ)というのには、作中の黒川だけではなく読者の私もさすがにびっくりしました。樺太、北海道の炭鉱で働いておられた畑中さんも、おそらくそうだったのでしょね。

戦争中の出し物の規制や言葉の変更も、畑中さんが時代をよく調べておられることが分かります。それにしても、「大東亜戦争のさなかだというのに『やくざ』や『殺人』とはけしからん」(139ページ)とか、「繰込所」を「進発所」にする(151ページ)という当局側の発想も、論理的によく分かりませんね。そういえば、今日の時代柄でしょうが、西川伸一「政治時評」(『週刊金曜日』2014年10月17日号)に、「俳句といえば、『昇降機しづかに雷の夜を昇る』という句を詠んだ俳人が、1940年8月に特高警察によって検挙された。特高はこの句を『雷の夜すなわち国情不安な時、昇降機すなわち共産主義思想が高揚するという』と想像力豊かに判断した。当の俳人は『呆れかえって笑うにも笑えなかった』(田島和生『新興俳人の群像』思文閣出版)」というエピソードが紹介されていました。すべては向こう側の解釈次第なのですから、そこに統一性とか論理性なんかないのは当たり前ですよ。

戦争に関連して畑中さんが、「政府の通達にしばしば樺太の字が抜けていることがあった。……きびしさが弛んでいるということになる。」(55ページ)といったことを書かれています。あらためて考えてみれば、戦時中だからといって、じつはすべてが統制一色、管理一色、一切の自由なし、ということなんてあり得ないです。それなのに、私たちはどこかでそう思っています。畑中さんのこうした指摘と同じようなものが、たとえば、池内紀『出ふるさと記』(新潮社 08年)に、寺山修司に関連してありました——「昭和十六年(一九四一)、父八郎が召集を受け、寺山母子は青森市へ転居、長男[修司]は聖マリア幼稚園に入園。……/この年の十二月、真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まった。『そうだその意気』『大政翼賛の歌』が流行。しかし、東北の港町では、まだそれほど戦時色が強まっていなかったのだろう。聖マリア幼稚園では十二月に園児たちがクリスマスの聖劇を演じ」た(p. 147)。

実態はじつはそうでもないのに、戦時色一色で管理が完全に行き渡っているという勝手な思いこみから個々人のさまざまな生き方の工夫を構想する努力をしないで、「仕方がないこと」と当局の言いなりになる自分の言い訳にしてしまう。もっといえば、積極的に時代の空気——まさに“世間”そのもの——に流されることを選んでもいるのです。

阿部謹也「世間意識からの解放 増補版『ペシャワールにて』を読んで」(ペシャワール会編『ペシャワール会報1983～2004合本』石風社 2004年)というのをたまたま目にし

ました。この会は、やはり「一筋の道を辿っている」中村哲医師を支援するものですからそこに掲載される報告などは鋭いものばかりですが、この一文もその中村哲氏の著作を書評していて鋭いものがあり、「世間」という曖昧な、それでいて個々人の責任を問わないで済ますシステムがあることを端的に衝いています——「日本では部落差別や外国人労働者に対する差別を自分の外の出来事として捉えようとする風潮がある。私は部落差別の問題は部落以外の人々の中に今も強く残っている世間意識がある限り、容易には解消しないと考えている。しかしこの世間意識に対する関心はほとんどゼロに等しい。……世間とはそれぞれの個人が持っている人間関係の絆であり、郷土や出身校、会社、などの中でそれぞれが独自に結んでいるものである。一人一人の世間は従ってそれぞれ異なっている。世間は個人以前に存在するものと考えられており、個人が世間を変えることが出来るとは誰も考えてはいないのである。しかし世間は個人にとっては実在であり、皆が世間を意識しながら暮らしているのである。その世間そのものは排他的で差別的な構造をもっており、私達の差別的な言動の根源に世間という枠がある。そして世間意識の存在に気づかないが故に私たち自身の差別的言動にも気づかないのである。」(p. 507)

で、いま世間はどんな事態になっているか。

加藤陽子・吉田裕「戦争を通して見えてくる近現代の姿」(対談「日本史研究の今」最終回『図書』2015年2月号)で、吉田裕氏によると、現在の日本の事態というのは右旋回が進行している只中にあります——二〇一三年版のNHKによる「日本人の意識調査」では、「日本は一流国だと思ふ人の割合は一九八三年の五七%をピークに急降下し、二〇〇三年には三六%になります。いわば自信をうしなっていたわけですが、それが二〇〇八年頃から持ち直して、二〇一三年では日本を一流国だと思ふ人の割合が、五四%になっている。／また、天皇制について言えば……二〇〇〇年代に入ってから、徐々に『尊敬』が増え始めて、今回『好感』とはほぼ並ぶんですね。／これも僕の理解を超えているのですが、二〇一三年の生活全体の満足度は過去最高の九一%です。これだけ不景気や格差の拡大が言われているにもかかわらず、です。こういう状況を歴史学からどう考えたらいいのか。もはや僕のフレームワークでは分析出来ない。」

で、その第9回「日本人の意識」調査結果の概要というのを図書館で探してもらって見ると、次のようにまとめられていました——

・日本に対して自信をもつ人は、時代状況によって増えたり減ったりする。その中で、最近の10年間はいずれの側面でも自信が高まっている。つまり、「日本は一流国だ」や「日本人は、他の国民に比べて、きわめてすぐれた素質をもっている」と考える人が増え、その一方で「今でも日本は、外国から見習うべきことが多い」とは思わない人も増えているからである。これまでの中で最も高かった1983年の水準にほぼ並んでいる。

・環境面、物質面、精神面、人間関係の4つの側面に分けて満足度を尋ねた結果では、人間関係を除く3つの側面について、満足している人が最近の5年間で増加した。生活全体に関しても、「満足している」という強い満足派が増え、「どちらかといえば」を合

わせて10人のうち9人は満足している。

たしかに、吉田氏の言うように「もはや僕のフレームワークでは分析出来ない」事態になっています。そして、そうした右旋回を象徴するものとして、書籍・雑誌の売り上げの一四年間連続前年割れが続く「逆風下の出版業界で例外的に活況を呈した分野がある。韓国や中国をその民族性にまで踏み込んで批判する、嫌韓・嫌中本といわれる書籍群だ」という、「愛国本読者の正体——『ニッポンすごいぞ』商法の背景」（『週刊東洋経済』2015年1月17日号）によれば、「こうした嫌韓・嫌中本は誰が買っているの」かを見ると、「50歳以上の男性、30～49歳の男性が主体」で、「購入者はまさに新書の読者層で、ネット上の得体の知れない人々ではなく、ごく普通の人たちです」といいます。そして、「中高年が主体だというのは、内閣府による『外交に関する世論調査』[2014年10月時点での調査]を見てもうなずける。中国に関しては50代以上、韓国に対しては60代以上で『親しみを感じない』と答える人の割合が顕著に高い。もともと読書習慣がある層と、中韓両国に対して拒否感が強い層がぴったり重なったところに嫌韓・嫌中本のブームが生まれたのだ。」

こんな社会状況のなかでサザンの陳謝が起きました。これについては本誌前号での「書評：中国が読める中国現代小説①」で私たち大人が職場とか地域といったそれぞれの自分の立つ位置で行動することだと確認しましたが、ここではあらためて、白井聡「桑田佳祐氏とともに闘う手段を見つけ出す」（「戦後の墓碑銘」『週刊金曜日』2015年3月6日号）を紹介しておきます——「文化の生産に何の貢献もしない単なる[ウヨクの]文化消費者が、文化の創造に血の滲む努力で取り組んでいる生産者を『監視する』と言い、それを社会は平気で見過ごす。桑田氏批判に向かったリベラル・左派にも同じ倒錯が見て取れはしないだろうか。これらの面々は、桑田氏が取った巨大なリスクの100分の1のリスクでも、自らの生業において冒したことがあるのか。桑田氏は確かに妥協したかもしれないが、われわれがなすべきは、批判よりも彼とともに闘う手段を見つけ出すことである。」

最初に紹介したところですが、畑中さんが炭鉱現場にこだわってこられ、そうした「一筋の道を辿っていると、必ずどこかで『同志』と遭遇」されたように、いまの時代だからこそ、それぞれの現場での各自のそれぞれのこだわりが求められているのでしょう。

いよいよ最後になりましたが、これまでの畑中さんのテーマのひとつである、朝鮮人との関わりの問題は、しっかりと黒川と源四郎兄が受け取っていましたね。とりわけ、最後の、坑内で弁当を黒川が京生と二人で食べるシーン（214～216ページ）は、圧巻でした。体が震えました！ここで小説を終えるのがセンスなのでしょうね。続きを読みたい！と思いました。

それにしても、鎌田源四郎兄の存在感は、これまでの連載にあった崔仁海などを彷彿とさせます。黒川が「鎌田兄は……野太いというか、度胸が坐っているというか」と感嘆しますが、そうしたエピソードも具体的で説得力がありました。鎌田兄が、アメリカ人捕虜

に非礼なことをした日本人炭鉱夫の所業に対して黒川少年と一緒に憤って、それを自分たちで埋め合わそうと憲兵の目を盗んで煙草を渡す（46～47ページ）とか、黒川少年に対して預金するよりも「有り金をはたらくらいの気持で、食べるものを手に入れるべきである」（195ページ）と諭す、といったことなどは非常に重いシーンです。

こんな鎌田兄は、黒川が成長するに欠かせない存在です。それが若者に対する大人の役目なのでしょう。そんな大人になりたいものです。じつは、最近、同居人の甥っ子（20代前半）が東京から赴任してきました。たまたま私たちが住む近くなので、「バリバリの大阪弁が怖い」という彼とたまに食事をするようにしていますが、その際に同居人が一番気を使っているのが、「お節介な親族」になることだと言います。親族といった狭い関係を越えたオープンな大人の関係が彼には必要なのだし、私たちにとってもベストなはずだ、と彼女は言います。きっとそうなのでしょうね。

鎌田兄が黒川少年に諭す、「有り金をはたかくらいの気持で、食べるものを手に入れるべきである」という考えについては、昨今の学生たちの食事を想うと大事なことなのだと思います。私の同居人も、たまに共にする外食の際に生協クラブの冷凍食品などを甥っ子に手渡ししています。本当にいまの学生たちの食事情況はすさまじいですよ。一週間の自分の食事をすべて携帯で写真に撮ってレポートさせることがあるのですが、それはそれはもう凄まじい風景です。カネがないからと少しでも食費をケチる、だから健康に生活できない、という悪循環です。ファストフード全盛の怖さです。安いということはどういうことなのか、ということを経済学として講義するのです——いまの TPP 問題が格好のテーマとなります——が、それでも目の前の安さに私の講義は太刀打ちできていません。

黒川が、出てきた樺太にいる人たちに手紙を出す姿も、いいですね。そして、寮の職員がそれに関心して空いている机を黒川に快く貸すなどの好意を示すのもじつに自然な展開で、読んでいて気持ちよかったです。こうした日常の配慮も、じつはほんとうは大人の仕事なのですよ。

ところで、気になったのですが、89ページの従業員数について。「岩亀が七千三〇〇、湯本が六千三〇〇、合計一万六〇〇人の世帯」とある後に、「われら一万四千」とありますが。職員が残りということでしょうか。それとも単純な間違いなのでしょうか。

さらに、専門用語でしょうか、「バッタ」（142ページ）という言葉ですが、これは前後の脈絡から推理するに、サボルことなのでしょうか。

そして最後に、畑中さんが渡辺係員に示す好感は、彼が淡々と仕事をして、余計なことも言わずに、つまりは労働者よりも上だという職員風を吹かしてけっして威張らないことに、その根拠があるのでしょうか。いま少し私には、そこらあたりが読み取れませんでした。これまでの小説においても畑中さんは労働者と職員との身分についていつも問題意識を持って書かれていましたから、それで私には余計に気になりました。

相変わらずの乱読です。勝手なことを書きました。きっと畑中さんはすでに『労働者』44号に向かって道を歩まれていることと思います。ご健筆を祈ります。

まだまだ春は遠いようです。ご自愛ください。

2015年3月1日

池野重男

私の手紙形式の文章に対して、これをあらかじめ畑中さんに見てもらったところ畑中さんより以下のような返事がありました。最後の方に書いた私の具体的ないくつかの疑問に対しては答えて下さっているのですが、その全文を以下に掲載します――

池野重男様

いつものように池野さんの長文を手にしめると「今回もひと安心」という気持ちになります。これも長い間の友情と連帯の賜物と言えるのでしょうかね。有難うございます。

さて、樺太の西海岸から福島県の炭鉱へ行くのに、日本海を渡って新潟へ行ってそこから鉄道で、ということに、やはり驚いたという人がほかにも居りました。言われてみて、そうかなるほどと思いましたが、当時は何百人もいたのに、「これ、へんだな」という人は一人も逢いませんでした。恐らく樺太西海岸の石炭輸送の航路であったのでしょうか。

作中の「川手のおっさん」については、今少し真剣に取り組むべきだったかとお便りを読んで思いました。池野さんのように鋭い眼力のある方から指摘されて、作者として、少々軽い気持ちで扱っていたか、と反省せざるをえません。

労働者は、昔から自分が企業に搾り取られていることは知りつつも、仲間の中で怠けるやつ、狭いやつ、要領のいいやつを一番嫌います。軽蔑します。そやつはいつしか仲間外れにされます。川手のおっさんは違いますが、やはりとくに仕事を急いでいるときは、みんないらしてしまいます。これはどうしようもありません。おっさんは「巧運は拙速に如かず」とも違うんですね。仕事の仕上がりもあまりよくありませんでした。結局、樺太でも常磐でも一人でやれる仕事を選んで配番するようにしていたように思います。ですが、書く側も決して面白がるようなことは禁ですね。

89ページの7300人、6300人、合計「一万六〇〇」のところは、完全に校正ミスです。原稿にはちゃんと「一万三六〇〇人」とあります。そして「われら一万四千」と所長が言ったのは言葉の綾といいますか言葉の飾りといいますか、本当は9600万なのに「われら一億」と言った類のもので、これは地の文でちょっと説明を入れるべきものでした。校正ミス、作者のミスです。

源四郎兄の存在をしっかりと受け止めて下さって嬉しいです。長編小説の骨組みを支えるのに、黒川少年だけじゃとても無理です。誰か「助っ人」が居なければ持ちません。ちゃんと指摘して下さったように「サガレン……」では崔仁海でした。今度は源四郎兄に出てもらいます。

バッタは脱線のことです。トロッコがバッタした、と言います。転じて、仕事を休むこ

とです。「なんだあの野郎、またバツか」と言います。九州の炭鉱では「ノソソ」と言いますが、意味は分かりません。

大平炭山の石炭にズリ（九州ではボタ）が少なくコストは安くついたであろう、というのはさすが御指摘ですね。ほかの炭鉱は塔路しか知りませんが（大炭鉱が3つありました）、そこにもズリ山はなかったように思います。ともあれ大平の石炭は良質だったのは間違いありません。それが運ぶ船がなくて貯炭の山。まったく日本の軍人というのは救い難く、すべての船を南の海にやってほとんどすべてをアメリカの潜水艦に沈められたんですね。そして樺太の炭鉱の膨大な貯炭は全部ソビエトに取られてしまいました。

お便りの中の俳句「昇降機しづかに雷の夜を昇る」に対する特高の解釈はまことに「笑うに笑えなかった」ですね。そう言えば哲学者戸坂潤は三木清などと共に特高に検挙されて獄死するんですが、ちょっと事情があって戸坂哲学を読む機会がありました。なんとともかんとともむずかしい文章で往生しましたが、特高がこれをどう解釈して治安維持法に引っかけたのか、とつくづく考えてしまいました。

また右旋回しているのは若者ではなく中高年のこと、というのも同感ですね。賀状にも書きましたが、総選挙で自民党の応援するのに日の丸の旗を振りかざしているのは戦後生まれの六十代前後でしたよ。ぼくらの世代もだらしなかったですが、戦後生まれの中高年も救い難いですね。

最後になりましたが、現在の学生も本当に大変ですね。3つの奨学金800万借りて、アルバイトをしてレポートはコピペですまし、地面が揺れるほど体力を落として、冗談じゃないですね。池野さんの苦労も並大抵ではないようです。そのように悪戦苦闘する学生たちと共に過ごすのもきびし過ぎます。どうぞお体だけは大切にして、来年3月に息切れしてしまった、などということのないように念じています。

『労働者』を『大阪経大論集』で取り上げてみる、まさに光栄の至りです。本もあと残り少ないですが、万一の注文に備えて取っておきます。

2015. 3. 9

畑中康雄

[池野による補記] 読者のみなさんへ：

本稿で紹介した『年刊 労働者』の購読希望者は、畑中さんに直接申し込んで下さい。上の手紙にあるように、「本もあと残り少ないですが、万一の注文に備えて取っておきます。」とのことです。よろしく願います――、

〒185-0014

東京都国分寺市東恋ヶ窪3-34-11

畑中康雄